

健康文化

## 或る生き方

今井田 二三子

Fさんが二十数年前、最初に外来を訪れられたときの記憶は定かではありませんが、すでに他の医療機関で肝機能異常の診断を受けておられたようでした。私のところで行った検査も二、三の数値に異常が見られたのと、その後の検査でA型でもB型でもない肝疾患ということまではわかりましたが、当時は積極的な治療を行うこともなく経過を見ていました。今ほど病診連携が密に行われていない頃の事で上級病院ではもう少し詳しい検査ができるのではないかと思います。病院へFさんを紹介しました。その結果は、肝生検をすすめましたが本人の拒否により見合わせますという報告でした。その後、Fさんが来院された時、受信時の様子を詳細に話されたあと「針を刺して肝臓を少し探ると言われましたが、そんな痛いことはいやですし、昔から言うじゃありませんか身体髪膚これ父母に受く、敢えて毀損せざるは孝の始めなりと、ねえー」超音波による検査も普及していない当時のこと、肝内の状態は全く見当がつかず、ねえーと同意を求められても私は返答に窮しました。

その後一年に一、二回ほど来院されその度毎ではありませんが「私はF家に嫁いできて先祖のお守りと、主人に仕えなければなりません、自分の病気のことはその次です」と口にされるのを聞き病気から逃避の口実ではないかと思っただけでもありました。

そのうちC型肝炎の検査が可能になり、FさんもC型肝炎抗体が陽性の結果がでたためまた上級病院へ検査に出向いてもらいました。これまた検査をすすめてから病院に行かれるまで可成りの日時を要したような気がします。私のところにも超音波検査装置程度はありますが、日進月歩の肝の診断の講演を聞くたび1cm いや更に小さい肝内異常所見を見つけなければといわれますと何とも自信のほどが危くなり病院へ紹介ということになるのです。

そのうち今度はFさんの御主人が病を得られてその献身的な看護にFさん自身の病気のこととは頭の隅に追いやられたかの様子で来院されても御主人のことを話されるのに終始し自分の検査は忘れて帰られることも暫々でした。

御主人が他界されて暫くしての検査で肝内に異常影が発見され、病院の先生

から検査入院をすすめられ、私の方もその報告をうけて検査をすすめました。「家に主人の遺骨を置いて入院などできません」の一言で退けられました。我ながら説得力のなさを歎きながら腕をこまねいていたところ或る日「私の病気の最後はどうなるのでしょうか」と尋ねられFさんの気持ちの片隅でも崩すことができると「お腹に水が溜まったり、意識が朦朧としたり、また時には食道静脈瘤が破れることがあります、そんな時は直ちに病院で出血部位の処置を受けていただかなければなりません」と話したところその返事は私の予測とは異なり「そんな時には自分で救急車を呼ぶ時間はありますか、また先生に電話をしたら来てくださいますか」という質問でした。次に来院された時の発想の飛躍がまた私を驚かしました。

「隣町の薬局で襦袢を買ってきました」。

紹介先の病院の先生も御主人のお骨があって入院できなければ納骨をすまされてはどうですかと問われたそうです。家族も呼ばれてこまごま説明をされた様子でそれが効を奏してか次の来院時の報告は「納骨はすませました」でした。

「しかし、9月に主人の七回忌の法要がありますので、法要をすましてから入院します」という返事でしたが、そのときはすでに黄疸の出現と腹水貯溜の兆候が見受けられこの状態で動かれる意志の強さに畏敬の念を覚えるほどでした。

御主人の七回忌が終わり私は半ば諦めの心境で何回目かの期待の薄い入院をすすめたところ今度は直ちに納得されました。

「腹腔内出血のようです、今朝ほど亡くなられました」病院の先生の電話を受けたのは入院から一ヶ月にもならない日の朝でした。

御自身の生き方をご自分の信念をもって貫き生き通された人と言うべきでしょうか。遠く及ばない何かを感じています。

(内科開業医)